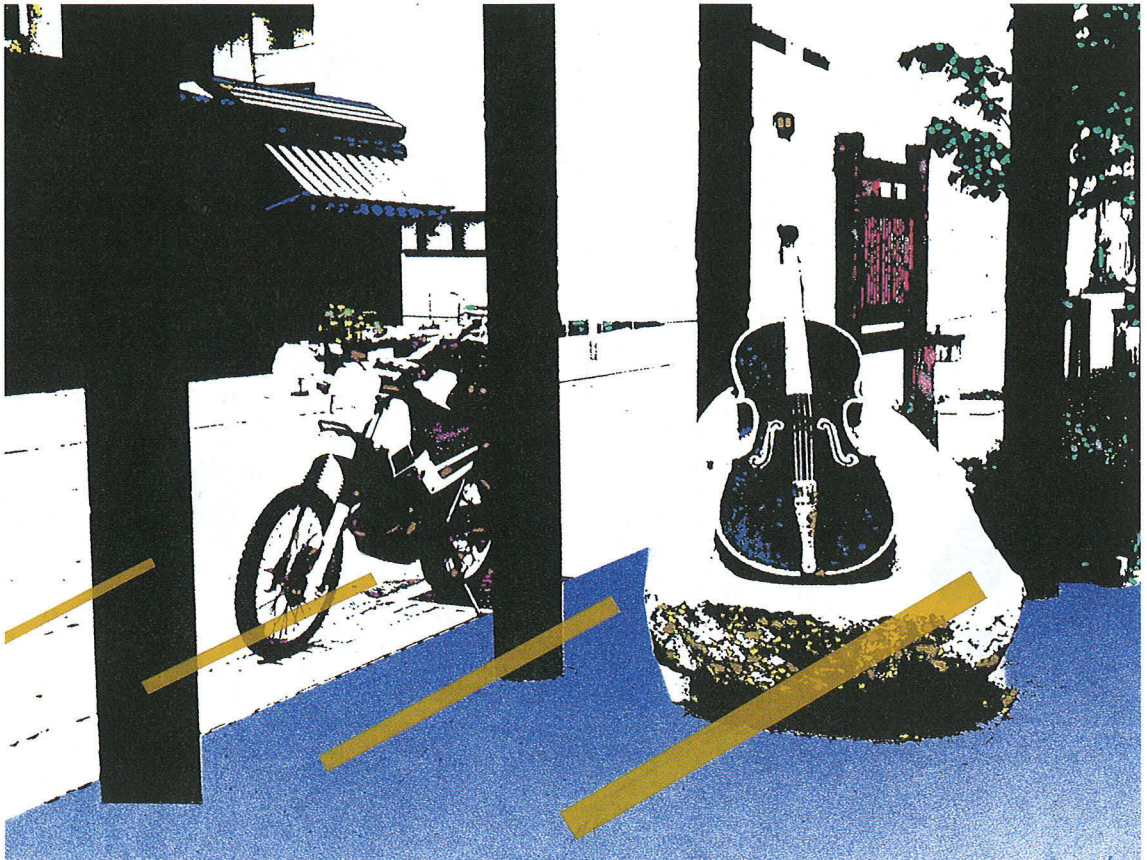


文化高知

'95年11月 NO.68



〔印象・イーハトーヴ〕 祖父江建樹

(財) 高知市文化振興事業団

二つの火

— 原点への回帰を想う —

宮地和夫

わたしの故里は、四万十川の中流域に位置して、生家も川のほとりにあります。

今をときめく四万十川も、わたしの少年期のころは、文字どおりの清流で、暮らしのなかにさりげなく溶けこんでおりました。

ほどよい起伏の広がる河原、その視野の先に天日山や、五在所ヶ森などの個性的な山容が、川を抱くように連なって、故里の母なる川の風情でありました。

夏の日の夕暮れどき、台地特有の夕靄が藪ぶき屋根の点在する村里に棚引きはじめます。

孟蘭盆がまいりますと、家々の前に立てられた二本の孟宗竹の先に、束ねた松明が挿され、高々と火が灯されます。

幾十、幾百の迎え火が、夕闇の迫る村里に燃え盛り、家も山もシルエ

ットとなって炎をひき立て、その明暗のコントラストは鮮烈で印象的な光景でありました。

迎え火は宝界(法界?)と言われ、篝火がかもしだす神秘的なまでに美しい火の群れを、わたしは子ども心にも、畏敬の想いで捉えておりました。

このようにめぐり来る毎に、祖先への供養をとり行う村人の、素朴で誠実な信仰心が、夕靄のように故里をしっかりと包んでいたように思います。

わたしのささやかな美意識と感性は、少年期の宝界の火の群れによって点火され、触発されてきたように思われてなりません。

そのころ、クニちゃん(仮名)という二十歳前の、いま風に言えば見るからにナイーブな娘さんが、都会の

紡績工場から人知れず帰ってまいりました。だれ言うことなく、結核に侵されて帰ったらしいと、ヒソヒソと噂をしておりました。

悲しさは噂のとおりで、クニちゃんは間もなく隔離のために、谷間に建てられた小さな藪ぶき小屋に入られました。

当時は、結核と言えば不治の伝染病として恐れられ、亡国病とまで言われていました。

このような悲惨さは、疲弊した農村にあつて、貧困に迫いつめられた姿を象徴する哀史の一コマでもありましょう。

ほどなくクニちゃんは危篤におち入ります。

「クニちゃんがおおごとぞネー!」と、クニちゃんがおおごとぞネー!と、凍てつく真冬の夜半、泣きながらわめくように、親戚や知人の家を走り回って伝えてくれたのは、隔離小屋からいちばん近くに住むMおばさんでした。



明け方、クニちゃんは息をひきとり、ひっそりと埋葬されました。

その日の夕暮れどき、無風の頃を見計らって藪ぶき小屋に火が放たれました。寝具はもとより、病床でのささやかな身の回り品などすべてのものが、炎となって夜空を焦がすのでした。

パチパチと音をはじかせながら、谷間に燃え上がる炎の色は、今だに胸の奥から消え去ることはありません。

いささかセンチメンタルな懐旧記となった感がありますが、次の時代への扉を開くための足場として、当時を今に至る連続線上で見直してみたい思いもあつたからです。

宝界の火も、隔離小屋に放たれた火も、当時のありのままの二つの火姿ですが、村人の暮らしのなかに意識しないやさしさが内包され、無意識のなかでの思いやりが確かに存在していたと思います。

物は無く、極めて貧しい明け暮れの日々でしたが、人間としての純度は高い時代であつたと思います。

人と自然にやさしく、大きくは地球へのやさしさが問われる時代、いま一度、原点への回帰について考えてみたいこの頃です。

(高知県立美術館友の会会長)

潮騒を聞きながらの思い出

福岡 翼

この夏、久しぶりに土佐清水へ帰って来た。高知を離れて、かれこれ三十年以上になる。

高校を卒業するまでの十八年間を、土佐清水で過ごした。かぞえてみれば、東京に住みついた歲月のほうが、高知に居た月日よりも、はるかに長いものになっている。

それでも体の芯のほうに、いつまでも潮の匂いがしみついていて、いづれも潮の匂いが抜けない。

郷愁や帰巢本能といったものとは違うなにか——いわば自分自身の原型を、こしらえてくれた風土というもののへの、いとしさであるうか。

人間が、生涯のうちに経験する喜怒哀楽のすべては、十代のころに、すでにその大部分を味わっており、大人になるということは、その記憶をなぞり、広げているだけにすぎないのだという気がしている。そういう意味でいえば、僕は、土佐清水で

過ごした十八年間で人生の大部分を、すでに味わっていたのだと思うのだ。映画が観たくてたまらなかつた。

本が読みたたくて、たまらなかつた。文章を書いて、誰かに読んでもらいたくてたまらなかつた。

ひもじいような思いで、高校生活をやり過ごしていた。

そのころ、土佐清水に「文化」を育む土壌はなかつたと思う。結果が数字という誰にもわかりやすい形で表れるスポーツ、たとえば相撲や野球や水泳やバレーボールなどは、強い者、弱い者という分け方で、人間を二分し、人生にとつて得なのか損なのかという見方で、評価されていた。

しかし目には見えない、手で触れることのできないもの、強いていえば、「人のこころ」を表現しようとする文学や、音楽や、絵画や演劇といった分野に関しては、不毛であつ

たといっている。

中村高校や宿毛高校、博多農業高校——いわゆる幡多四校に呼びかけ、演劇祭を開こうとして走りまわったり、文芸同人誌を発刊しようとして、広告とりに汗を流した日のあつたことを、なつかしく思い出す。

いま、高知はどうであろうか。時代がすすみ、社会の変動も、人の心の流れも、瞬時にキヤッチできるようにになった。

「文化」は育っているだろうか。文学や、音楽や、絵画のジャンルでは、「高知出身」ですという方にめぐり合う機会も多くなつた。

しかし映画を含めて、演劇の分野、出身の人が少ない。

台詞のアクセントに難があるという点がひとつある。郷土出身の作家、大原富枝さんのエッセイの中に、「市場へ続く道なのね」とつぶやいたとき、同行していた同業の、東京の下町出身の女性作家から、「いちばではない。いちばよ」と、強い口調で訂正され、ひどく傷ついた日のあつたことを書いたものがあつた。僕も似たような体験は、何度もあつた。「虹」「椅子」「雲」……訂正され、教えられ、笑われながら、それらは、人からの助けによって克服できるものではなく、自分との闘いでしか、身につけることのできないものだ、と、納得するまでに、何年かかつたことだろう。

熱しやすく冷めやすい。ものごとに対しての取りくみ方が大雑把で、粘着性に欠ける。

風土が育んだそんな県民性も、微妙な感情表現を身上とする職業には、向いていないのかもしれない。

久しぶりに帰省して、昔の演劇部の仲間にも会つた。みんな、もう子育ての終わりつつある年頃になっていたが、その子供たちの何人かが、親の夢を継ぐかのように、音楽や、絵描きをめざして、東京あるいはニューヨークに行っているという話を聞いて、僕は少しだけ涙ぐんだ。

(TVレポーター)



水と酒

山頭火・良寛のこと

堀内 豊

無門塾主の大野武夫(社会事業家)が亡くなったのは昭和四十六(一九七二)年七月で、その三カ月後に令弟の大野龍夫(画家)に誘われて松山へ行った。

当時、私の息子と娘が松山に遊学中だったので、ふたりの借家で龍夫氏と酒を酌みかわしながら、語り明かした。

「このごろのヒッピー族は、山頭火ブームに煽られて、疑似放浪者になりすましている……」と、龍夫氏が言う。私は軽く頷いた。

「堀サン、どうだろう。あした一草庵へ行ってみないかね」と促されたので、即座に同意した。一草庵は、山頭火の終熄の地で

ある。

翌日。ふたりは身軽な格好でバスに乗りこんだ。護国神社の近くで下車した。白い幟がはためいている。秋の大祭——。そういえば、三十一年前(昭和十五、一九四〇)年の

大祭のふるまい酒に酔いつぶれた山頭火は、脳溢血で倒れて、十月十一日早朝に絶命した。

この奇しき日に、龍夫氏と御幸町御幸寺門外の一草庵を訪ねることにしようとは……。

一草庵の門前に、「鉄鉢の中にも霰」の句碑が建っている。庵守の横田白髪頭さんが、山頭火の網代笠や鉄鉢など、数かずの遺品を賞翫させてくれた。

片隅の机上に遺著の『愚を守る』『あの山越えて』『種田山頭火句集』『草木塔』などを平積みしていた。それらを視ているうちに、ふと脳裏にひらめいたのは、(まさしく山頭火は、水の俳人だ)という思弁だった。

では、山頭火の俳句から数句挙げると、
へうへうとして水を味ふ
水に影ある旅人である
岩かげまさしく水が湧いてある
こんなうまい水があふれてる

水音しんじつおちつきました
以上は処女句集『鉢の子』から抜粋したが、以外の第七句集『鴉』までの「水」にちなんだ句は割愛したものの、ずいぶん「水」について句作している。

ところで、先ごろ病没した作家、山口瞳は、「酒の飲めない人は本当に気の毒だと思う。私からするならば、人生の半分しか生きていないような感じがする」と言った。そうすると酒呑みの山頭火は、人生を十分に生きたといえるかどうか。私にいわすと、山頭火の酒は放埒の霰で、かざられた他者の人生を半分以上も損なわせた形跡があるから「本当に気の毒だと思う」のである。

端午 玉島に於て

樽を携え客と共にここに台に登る
／五月の榴花長寿の杯／ほのかに
聴く屈原の汨羅に湛みしことを／衆
人みな酔うて哀みに堪えず

円通に攀登すれば夏木清し／君に
杯酒を進む暑を避くるの情／一樽
酌み尽くして詩賦を催し／熱さを忘
れさらに聞く暮鐘の声

このように、良寛は美しい酒を節度よく飲んだが、山頭火の場合は違う。
大正十三(一九二四)年。山頭火四

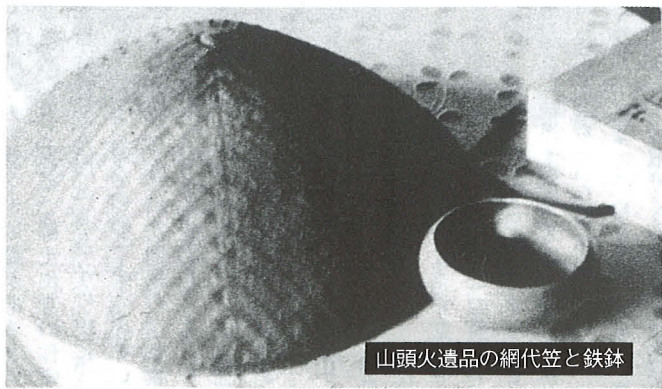
十三歳のときに、乱酔して熊本市電の前に立ちほだかつて、進行を止め一悶着を起こしたり、泥酔して大暴れの果てに警察にあげられたりと、飲酒を自分でもてあまして、遂に出家得度をしたから、良寛が十八歳で出家したのとずいぶん趣がちがう。

国上山
青葉わけゆく良寛さまも行かしたろう
日本海岸
ころもなしくあらなみのよせてはかへし
砂丘にうづくまりけふも佐渡は見えない
あうたりわかれたりさみだるる
など、ほかに三句作っている。
句は残っていないが、このとき山頭火は和島村島崎の良寛の墓に詣でている。想像すると山頭火は、良寛の事歴をすくなく識っていたと



一草庵

妻子を見捨てて各地を放浪(山頭火にいわすと托鉢行)し、俳句結社の知人を尋ねては寄食し、宿り木のような人間として、放埒な酒をのんだ。だが彼は曹洞宗の末席につながる禅僧で、法名を耕畝といった。およそ禅僧は、戒律を守って飲酒を慎むといわれているが、概してそれは表むきのことで、後で記すように、山頭火と同じ宗派の良寛だって、玉島(岡山県倉敷市)の円通寺で修行していたとき、酒に親しんでいる。當時を回顧した詩二篇を紹介すると――。

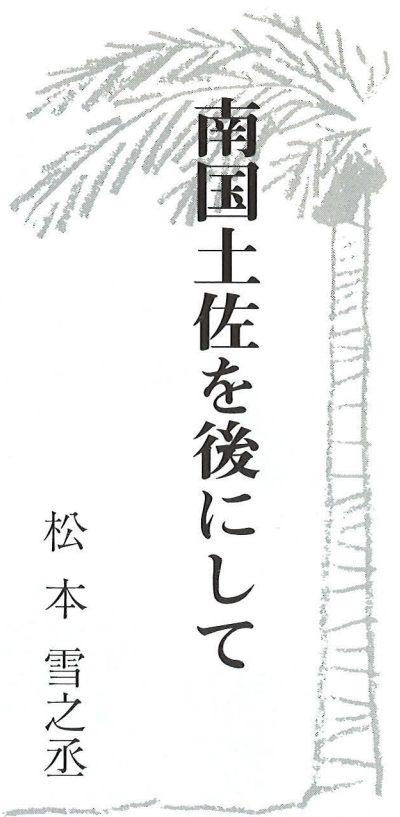


山頭火遺品の網代笠と鉄鉢

思う。例えば、良寛が托鉢中に蒲原平野の百姓に、「良寛さ、一杯やろうね」と呼びとめられて、良寛はみずから酒を買いに行き、「汝一杯吾一杯 其盃ノ数少ナカラシム」(良寛禅師奇話)の調子で、献酬を重ねたあげく、あせ道で寝こんでしまつて、そのまま一夜明かしたという故事も、山頭火は識っていたではなからうか。だとすると、山頭火は酒好きの良寛のために、かれの墓碑に地酒を注いで、残りの酒をのみ干したではなからうか。事実そうなら、実にさわやかな心模様の光景がくりひろげられたことになるが……。

既述したように、山頭火俳句の主題の多くは「水」で占めている。だいたい男なら身覚えがあると思うが、酔後にのむ水は格別うまい。下戸の私が言うからまず齟齬はなからう。だから山頭火は、たぶん酔後に「こんなうまい水があふれている」と、実感的に句作したと推測する。
いっぽう良寛が、漢詩や和歌に描いた「水の世界」は、清冽な流れに身をまかせて、優遊としているからすばらしい。
酒の味わい方。水への関心は、良寛と山頭火とはずいぶんへだたりがある。
(高知県地方職業安定審議会委員)

南国土佐を後にして



松本 雪之丞

五丁目は変わった。半世紀分の変革をここ二、三年でやらかしてしまつたような変身ぶりである。

つい先だってまで、天下の往来に、さながらセンターラインでもおつかぶせたみたいにも、さも因縁ありげな居酒屋の群れなぞがのさばっていた。旭に向かい肩身の狭い電車通りに、ずいぶんと時代がかつた光景が連なっていた。

それらがことごとく、今風の色レングの街路に置き代わっていく。城西市場がそれに習う日も近い。戦後五十年の手垢にまみれた小路は通るたびに小踊りせずにはすまなかつた。

「見納めか」と、出立の前夜、振り返りつつ、いとまごいしてきた。いつの日にか訪ね来て、爬虫類にも似た、一種どうしようもない怠惰と

ぬめりにお目にかかれることはもうない。思い入れに過ぎた、それは五丁目だつたのだろうか？

気がつけば新たな日々に入っていた。

ベイエリアに、かつての渚を……干潟を……と躍起になつて、都といわれるメガロポリスにいる。

さりげなさを装っているようではあつても、そこには実は目いっぱいの人知とおびただしいかぎりの資金が注ぎ込まれていく。その甲斐あつてか、いつしかサギが舞い、野性植物だつて繁茂し出して、そこかしこに期待していたものも蘇りつつあるが、とうてい人造のよそよそしさは拭いされるものではない。

つつい鏡川小景……ということ

になつてしまふ。

夕刻、泰然と身を置くことが無上だつた。特効薬よろしく、わだかまりのことごとくが氷解していった。とうとうと流れる大宇宙の摂理に身を任せて、頓着はなかつた。川底にちりばめられてある小礫の一つひとつまでをも見極められる清冽に腹まで浸して犬どもは嬉々としていた。人々にもまたそれへの共感があつた。人口三十万を擁する県都の直中を、こともなげに清流がよぎつていく。ほどなく世紀の境を越えようとしている大國の、とかく俗に過ぎたる、と言われがちな民族にとつて、これは奇跡といふべきことなのかも知れない。

何かが弾けたような、一種名状しがたい、人の造り上げた価値観の、その物差しでは捕捉しきれない、体験や常識をもつては判断のしづらいもの、例えば、それまで砂を噛むような語句の羅列でしかなかつた哲学書に理解の手立てが与えられたようなときめき、そんな感慨を味わせてくれた。

「モノばなれ」が言われて久しい現代文明にあつて、路上市には、依然としてモノの価値が息づいている。冬を春に踏み越え、初夏へと柑橘類が寄せくる。

ひとつとところで一つのものをじっくり噛み締めるいとますら与えられずに打ちすぎてしまった、めくるめく三年余だつた。

折々のピン止めの際、その針先に明滅したものが「竜馬」だつた。

一丁目は舗道脇の胸像。それは電話ボックス上にいた。

息子どもが通つた第四小の校歌。たえず竜馬的空間がくらしに見え隠れしていた。それは、ヒーロー確証であり、同胞であることへの自負のようなものであつた。

白状すると、実はまだ「竜馬がゆく」を読んでない。「いまさら……」の呪縛に、ついやりそびれてしまつた。もちろんこだわりから解き放たれた今、心置きなくむさぼつてみせる。

城下の日々ではまた、雪之丞一座なるものを仕立てて宴の戯言としゃれ込んでいた。

歌舞伎の真似事の、リズムも旋律もあつたものでないせりふ回しやらおどけて投げてよこすおひねりを血眼になつて掻き集める図やらが受けて、なんとなく市民権が得られたよ。うな、恒例の〇〇公演などと銘打ち、その無軌道ぶり、我ながら堂に入り、悦に入つたものであつた。

離高に際して、そんな仲間のうちから、それはけだし当然のことだつたのかも知れないが、「さよなら公演」という話が持ち上がった。

「高知の城下に来てみよう」と題した拙冊の、ホテルの大広間を借り切つての、なんとかを上げます会まがいの、家内をして「おとうさん、二度とこんなことは……」と言わしめた出版記念パーティーの臆面のなさぶりをまたしても繰り返す羽目になつていた。

かくして酒席の一隅にわか舞台をしつらえ、今宵がかぎりの大茶番。いつしか、隠し芸ならぬ、すでにお蔵入りして久しかった十八番なども飛び入つては、主客乱れての抱腹絶倒、この街でなくしてはとうてい得られない別れの時が熱っぽく繰り返されていった。

これに似たようなこと、「土佐日記」にも記されてあつた。

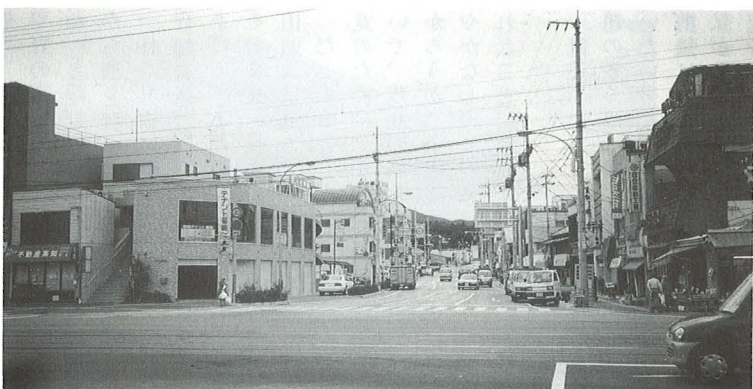
「珠玉の日々」。

自分にとつての、それがいったい何であつた？

これから先の人生にとつて、何でありつづける？
すでにもうどうしようもないくらい、「わが・南国土佐を後にして」がこの胸に拡張を始めてしまつていく。(前高知営林局計画課・現林野庁)

ウメとトマトは覇権を賭けつづぜりあいを演じていた。
あえて作為に及ばなくたつて、ここでは四季の装いがショーウィンドーとしての飾り立てをやりおかせてしまつた。

語りおさせた、と思つていても、なおもまた、市井のたまたまの中からほくそえみが反復されてくる。



高知市文化振興事業団編	A5判 一六〇頁
高知のエスプリ	定価 二、〇〇円
山本 大著	四六判 一六八頁
幕末の青春 坂本龍馬の生涯	定価 二、〇〇円
依光 裕編著	四六判 三九八頁
珍聞土佐物語 上下巻	四〇八頁
鈴木文彦・井本正人 関根猪一郎 著	定価 一、六〇〇円
協同組合と地域づくり	A5判 一三六頁
清水幸男 著 (高知レポート5)	定価 一、〇〇〇円
高知県の工業	A5判 一一二頁
外崎光広 著	定価 一、〇〇〇円
土佐自由民権運動史	A5判 四二四頁
外崎光広 編	定価 二、八〇〇円
土佐自由民権資料集	A5判 三四四頁
今井嘉彦 著 (高知レポート2)	定価 三、〇九〇円
河川はよみがえるか	A5判 一〇八頁
岡林清水 著	定価 一、〇三〇円
高知県文学散歩	四六判 二七八頁
高知の文化を考ふる会 編	定価 一、八〇〇円
高知の文化を考ふる	A5判 一八八頁
高知市文化振興事業団編	定価 一、二〇〇円
わがまち百景	A5判 二二四頁
筒井広道 著	定価 一、二〇〇円
画帳の歳月	A5判 二五六頁
土居重俊・浜田敦義 編	定価 二、〇〇〇円
高知県方言辞典	A5判 七三六頁
高木啓夫 著	定価 六、一八〇円
土佐の芸能	B5変 三三六頁
	定価 四、九四四円

夢追人

大平哲郎

本格的なアート・コーディネイターとして仕事を始めたのはここ約十年ぐらいであるが、荒涼とした美術畑に飛び込んでからすでに二十余年が過ぎてしまった。

画商という仕事は一種独特な性格を持つ特殊な職業であり、文化社会のニーズにも応えてゆかなければならない存在なのであるが、たまにとり上げられるニュースも悪いものばかり、実に情けない現状である。しかし、今の仕事をもってして、この仕事を選んで本当に良かったと思っているのである。我々の仕事は芸術家を見つけて売り出すことはもとより、地域文化にも貢献してゆくという大きな目的もあるのである。

ここ二年間、県、市の委員としていくつかの機関に在籍し、発言し、行動する機会を持つことができた。このことは、自分の仕事以外の分野で力をためられる良いチャンスであったと考えている。お役目が充分に

果たせたかどうかは別として、とてもすばらしい経験をすることができた。そして力いっぱいできたと思自負している。

これらに共通していたことは常に「対ひと」であったこと、人の輪のつながりがすべてであったこと、今の仕事を通して参画した経験がこれからもあらゆる面で生きてくると確信していること、など大きな収穫であった。

常々、「今の環境のなかでできることは何かないだろうか？」と、考えている。その中で生まれたものに「ふれあい会」という組織がある。組織という言葉は誤解を生じやすいし、嫌だが、今年八月目を迎えるこの会は社会的に何ら力関係を持つわけじゃないし、入会金・年会費もなし、吹けば飛んじゃうような会である。美術に興味のある人で自由参加システム、一回でも参加すれば会員資格が得られる。この方式で続けて

きて、会員数もとんでもない数になってしまった。永年の成果だと言えは聞こえはよいが、資金なし、人手なしで運営しているの、手ばかりもいっぱいだが、気楽な会なのである。むしろ、僕の画廊の営利とは全く切り離れた存在で、「人」あればこそという基本原理でやっており、これからは大切に守ってゆきたいと思う。

この会は先にも述べたように金がないので、毎回参加者は自分の分を負担しなければならぬ仕組み。たとえば、第四回、「石垣定哉・講演会」は、とある喫茶店で行い、参加費は会場費とお茶代で一人六百円、諸国を制作旅行する画家のさまを、スライドなどを使って講演、やんやの喝采をあげた。ちなみにこの時の参加者は約七十名であった。

講師の先生にお支払いする礼金がないので、出世払いということが無理に頼んでいる。

「高い壇上からする講演とちがいに、参加者と同じ高さの視線でものを言い、考えることの重要さを逆に皆さんから教えられた」と、ある講師の先生はおっしゃった。この会も現在は一〇回目、愛媛県の町立久万美術館へ五十名の遠征をこの八月に終え

民ギャラリーと、各団体から意見や要望書等が提出されたと聞く。この積極性が大切で、これらをどう煮つめてゆくかが最大の問題点であろう。

金さえ出せばどんな建物でもできる。しかし「人」をはじめ内容の濃さや特色は金だけで容易に解決のつく問題ではないのである。高度成長期からバブル最盛期にかけて、全国各地を見て同じような、パターン化された建築物が乱立、画一化されたおそまつな物をいっぱい作ってしまったのである。反面、なるほどどうな



町立久万美術館にて第10回ふれあい会
講師は松岡義太氏(久万町総務課長)(H7.8.5)

らせられる内容の美術館が近くに二つほどあるのでご紹介しよう。一つは久万美術館(愛媛県久万町)。この美術館は個人寄贈のコレクションによる企画・常設美術館で、この内容を生かすためにいかなるハードを設けるか、元文化庁の半沢氏を招き討論の末できあがったもので、地域性をうまくとらえ、美術館としては異例の総木造建築である。愛媛県の文化はこの小さな町で保っていると言ってもよいほどの内容である。全国区と言っているだろうか。学芸員や受付の方々も熱心である。

もう一つは、丸亀駅前前の丸亀市立猪熊弦一郎美術館である。故猪熊氏と設計者の断と偏見で建てられたものである。結果、すばらしい内容であるとの大評価を現在受けている。高知市総合文化施設は幸いなことに最後発である。ゆえに先の数々の失敗例、成功例を見ることができ。この事はあきらかにプラスなのである。市民は決して単なる箱ものを急いで求めることがあつてはならない。その結果、どういう末路をたどるか、いくつかの失敗例がそれを示している。行政はそれをつかさどる機関なのだから謙虚な姿

勢で邁進すれば答えは自ずからでてくるでしょう。ごく当たり前のことが当然なこととして評価を受けづらい今の社会だからこそ、地道な営業活動が行政側に要求されてくる。いつの日だったか、ある機関紙に「エッセイとして『日本のタコ穴社会』というタイトルの文を掲載したことがある。異なる社会を穴から首を出して見ているタコに皆が寄ってたかと言おう。「変なものを見るな、この穴にいる限りお前は喰うのには困らないし、出世も意のまま」。結果そのタコたちはお互いの足を共喰いするのである。とてもきびしいた」とえ話であるが、こんな社会機構にしたのも我々だろうし、今後の大きな戒めとしてとらえている。

高知文化をよりすばらしいものにと祈っていることは、僕も読者も同じこと。

今回の横山隆一記念館のためにプラン作りを一生懸命なされた隆一先生には頭が下がる思いであり、「常識」という二文字を大きく飛び越えたものであるのではないかとという期待が僕自身の胸に大きく宿っている最中である。

ギャラリーおおひら代表
高知市文化振興ビジョン
策定委員会委員

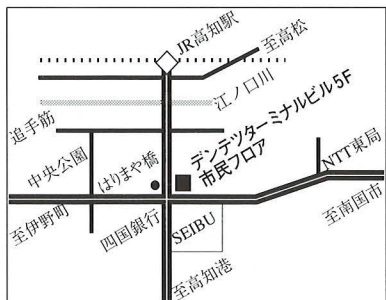


第4回ふれあい会 石垣定哉氏を囲んで(H5.11.10)

市民フロアのご利用を

展示や会議に最適!

広さ・内装 96㎡壁面布クロス張り、
スポットライト完備
所在地 高知市はりまや町
一―五―一―デンテツ
ターミナルビル5階



申し込み (財)高知市文化振興事業団
☎7314365

お楽しみはこれからだ！

映画『絵の中のぼくの村』

撮影日誌

井坂 聡

この号が皆様のお手元に届くころには、完成披露試写会で既に、映画『絵の中のぼくの村』をご覧になった方もいらっしゃると思います。この映画は、七月二十二日から八月二十二日のちょうど一カ月の間、県内のあちらこちらで撮影をし、またオーディションを含めた多数の高知の方に出演していただいて作り上げたものです。

私たちのわがままに、嫌な顔をせずにお付き合いいただいたたくさんの方々の献身的なご協力がなければ、とても完成できなかったことを、改めて紙上をお借りして御礼申し上げます。どうもありがとうございます。

さて、私たち作り手の最大の願いは、言うまでもなく一人でも多くの日本一のヤブツバキの木の枝に乗っけてしまおう、という大胆な撮影を行ったときのこと。

三人の頭上にそれぞれ一輪ずつ赤い椿の花を飾って、「この花が、皆さんを象徴する花なんですよ」と筆者が語りかけると、すかさず筒井さんが、「どうせなら、この花ぐらい私たちが美しいときに撮影してくればよかったですのに」

方に映画を見ていただくことです。そのためにはこの映画をもっと身近なもの、極端に言えば自分たちのものぐらいに感じていただくことが一番の近道のように思います。そういう気持ちを含めて、今回の撮影のエピソードを幾つかご紹介したいと思います。

撮影前の稽古で

撮影に入る前に、子供たちを集めて最初の稽古を行った時のこと。主役の双子を演じる松山慶吾・翔吾の二人が、興奮したのか照れくさいのか、芝居も台詞もフニャフニャである。姉の友達の子中学生たちに囲まれて、ベットとじゃれるように、あちこちいじくり回されるシーンなど、恥ずかしがってどうしようもな

昔取った杵柄

撮影終了後、某スポーツ新聞に、『孫のような松山慶吾を手取り足取り演出』『双子にとっては、それこそおじいちゃんのような』と書かれ、大いに機嫌を損ねていた東監督の撮影中のエピソード。子どもたちがコマ遊びをするシーンがあり、学校の撮影の昼休みの時に東監督自らコマ回し指導に乗り出

い。「ちゃんとやれ！」と筆者が怒っても、「どうやるか、わからんもん。井坂さん、代わりにやってみな」そんな嬉しいこと、喜んで代わってやる、と言えるはずありませんよね……。

アツイ！ ヒヤい！

撮影開始二日目のこと、午後になって慶吾が突然ぐずり出す。映画の



スタッフの真剣な眼差しに比べてどこかとぼけた表情の慶吾と翔吾

冒頭、雨の中を双子が家に帰ってくるシーンなのに、草履が濡れる、地面がビチョビチョなのが気に食わんと無茶苦茶を言う。その内に「暑い、暑い」を連発して座り込んでしまう。のぼせたのかと思って、メイクさんに頼んで氷水につけたタオルをおでこに当てると「冷やい！」 離すと「アツイ！」 くっつけると「ヒヤい！」 そんな馬鹿馬鹿しいやり取りを三十分ぐらいした挙げ句、仕事にならないので撮影を中止して家に帰したところ、熱が三八度あるという。子どもはすぐ熱を出すものだから、とは言え反省しきり。(しかしこの日以降、「アツイ！ヒヤい！」はスタッフの間で流行語となる)

三人のお婆さん

映画の中の、村の守り神のような三人のお婆さんを演じたのは、吾北村の小川港さん、北川留壽さん、筒井三三四さん。皆さん、七十を越えてらっしゃるといふのに、とても元氣だ。特に筒井さんの滑らかな口舌には、我々もたじたじとなるぐらいだ。

この三人を、吾北村の誇



木の上の三人のお婆さん(撮影:東陽一)



コマ回し指導中の東監督(この後、悲喜劇が……)

した。興味津々集まってくる子どもたちに取り巻かれて、得意顔の監督が手乗りゴマの技を披露している。何回目かの時に、コマが大きく飛んでしまった。慌てて追っ掛けようとしたが、足がもつれてズデーンと前のめりに転んでしまい、ほこりまみれ。子どもたちの親も大勢見に来ており、大爆笑の中、立ち上がった東さん、「気持ちはいってるんだけど、体が動かんなあ……」

大喧嘩

撮影も後半にさしかかったある日のこと。双子のお世話をお願いしていた石本さんが血相変えて、筆者を呼び寄せて二人の所へ行くと、慶吾も翔吾も顔中、体中ひっかき傷だらけで鼻血をたらして、衣裳にまで血が飛んでいる。聞くと、移動中の車の中で、些細なこと言い争いが始まったと思ったら、一瞬のうちに掴み合いの大喧嘩になって止めたが、時す



コジュケイを持たされておっかなびっくりの慶吾

に遅くこのざまだと言う。その日の撮影はメイクでごまかして続行したが、転んでもただでは起きないのが映画屋。映画の前半の山場、魚釣りに行った二人が喧嘩をするシーンでは、本気でやらせようと作戦を練る。

当日の現場ではわざと二人につっけんどんにして、本気で喧嘩しないと家に帰さないぞ、と徹底的に脅かし、また、一人の手をつかんで、もう一人を突いて、こうやってやるんだとけしかけた。

ついに、慶吾が泣きだした。「こいつ、怒ってるで」と翔吾が軽口をたたいた瞬間、慶吾が翔吾を殴りはじめた。

(次頁につづく)



映画に写す前には、炎天下のこんな作業も必要です
(撮影：東陽一)

「痛い、痛いじゃないか！」翔吾も顔を歪めた。後は二人とも泣きじゃくりながら、手にした釣り竿を振り回す。ヒュンと空を切る音や、パシッ！と体に叩きつけられる音が容赦なく聞こえてくる。そして台本通りに翔吾が泣きながら逃げ去っていく！

「カット！」東監督の声と同時に、二人のところへ飛んでいく。女性スタッフが二人を抱きしめてあやしている。二人の顔に生々しいみみず腫



工事用足場を組んでの大撮影

れが、くつきりとついている。仕事とはいえ、酷いことをした、といったまれない気持ちになる。監督が慶吾に近寄り、「よく頑張ったな」と声をかけると、慶吾はしゃくりあげながら、「……今の、OKやったか？」というではないか！スタッフ一同、思わずジーンと涙が浮かんだ瞬間であった。

(映画「絵の中のほくの村」チーフ助監督)


ズームアップ

東南アジア

<1>

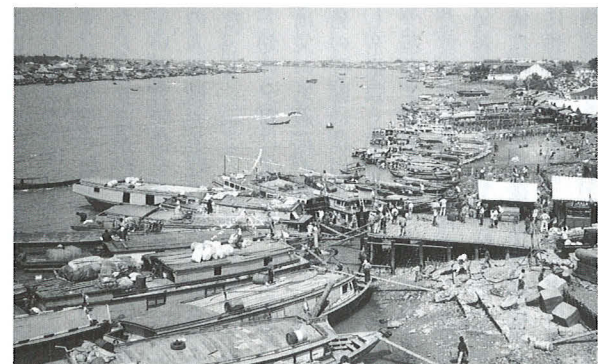
近くなつたアジア

小林英治



目覚ましい経済発展を遂げつつある中国や韓国、東南アジアの国々を含む東アジア地域は、いま「世界の成長センター」として注目を集めている。タイやフィリピン、インドネシアなどかつては低開発に悩んでいた国が年率六〜八%という高い経済成長率を誇るまでになった。一方わが国の企業は安い労働力を求めて生産拠点をこの地域に移している。このためビジネスマンたちがせっせと中国や東南アジアの国々に出かけて行き、同時に若い人たちが勉学や就労の機会を求めてわが国にやってくる。フィリピンやスリランカからは花嫁さんが嫁いでくる。このブームにより「アジアが近くなった」といわれるが、何か「ちょっと変だな」と思わざるを得ない。わが国はもともアジアの一員だし、中国や韓国はすぐ隣の国。フィリピンだって海を越えて、わずか三時間

半の空の旅で到着する。歴史的にもわが国は昔からこれらの国と往来があり、さまざまな文物がもたらされたことは正倉院御物が物語る。明治以来それがおかしくなってしまったのだ。西洋に学べということ、「脱亜入欧」のかけ声のもと人々の眼は欧米へ向けられた。そして五十年前にはあの不幸な戦争があり、戦後復興・経済の建て直し・成長と忙しかったわが国とアジアの国々との真の関係が疎遠になってしまった。そして彼らを「近くて遠い国」にしてしまったのだ。私は昨年まで二十六年間にわたって、フィリピンとインドネシアで開発援助の仕事に携わってきた。家族とともに初めてフィリピンの地を踏んだときには、まだ日本軍が犯した蛮行の後遺症が強く、対日感情が極めて悪かったのを思い出す。あの頃に比べると大きな変わりよ



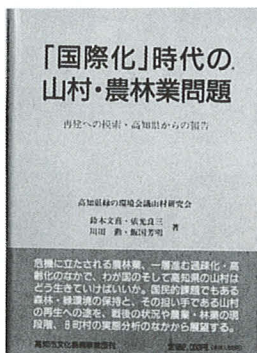
ムシ河風景 (インドネシア・パレンバン市)

うである。しかし、今日のいわゆる「アジア・ブーム」は経済的動機に基づく面が強く、非常に偏っているのではないかと思う。アジアの国々の重要性がようやく認識されるようになったのはよいが、アジアとのパイは経済だけでなく、文化・芸術・学術面を含めたもっと太いものでなければならぬだろう。大江健三郎さんがノーベル賞を受賞したとき、アジアの人たちの多くは大江さんの名を知らなかったという。大江文学はヨーロッパの二十カ国語に訳されているが、アジアで翻訳があるのは韓国だけだった。同様

にアジアの国々のどれだけの文学作品が日本語で読めるのだろうか。次に私はこれからのアジアの国々との付き合いを考えるとき、ビジネスマンや一部の専門家ばかりでなく、一般の人たちを中心とした人と人とのつながりが大切であると思う。本県はフィリピン・ベンゲット州と姉妹県の提携をしている。ベンゲット州は首都マニラから北へ二百五十キロ行った山岳地帯に位置し、標高千五百メートルの山並みの間に、へばりつくように町や村が点在する。二十年前県が友好関係を結んだとき、「何でこんな山奥の州と友好関係を」といぶかしがる向きもあったと聞く。しかしいま友好の実が実り、ベンゲット州では本県で農業技術を学んだ人たちが野菜や茶の栽培に取り組んでいる。この州はマニラ首都圏へ野菜を供給する重要な基地となっており、私の家族もマニラ滞在中その恩恵に浴したのだ。本年八月には高知市がインドネシアのスラバヤ市と姉妹都市関係を結ぶことになった。現地では「経済その他の交流を」と期待が高いという。これらの友好関係が真に実りあるものとなり、東南アジアとそこに住む人たちが私たちにもっと身近な存在になることを期待したい。(高知大学人文学部教授)

「国際化」時代の山村・農林業問題

再建への模索・高知県からの報告

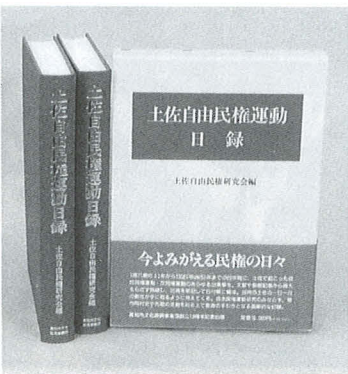


高知県緑の環境会議山村研究会
鈴木文薫・依光良三・川田勲・飯国芳明 著

A 5判・上製本・288頁
定価2,000円(本体1,942円)

高知市文化振興事業団創立10周年記念出版

土佐自由民権運動日録



土佐自由民権研究会編
B5判・上製本・函入り 496頁
定価10,000円(税込)

紫式部の造った男たち [IV]

夕霧と柏木

藤田 加代



光源氏と頭中将の嫡男たちも、また、紫式部の造った興味ある男たちです。一人は源氏の子息で葵上腹の夕霧。慎重実直、理性型の人物で、源氏物語を代表する「まめ人」です。今一人は右大臣家四の君腹の柏木。先のない恋に燃え尽き、早逝した頭中将の長男です。同世代で従兄弟同士であり、親友でもありました。しかも万事対照的な造形で、とりわけ「見る人」——観察者——としての青春を経て生き永らえ、源氏の後継者になった夕霧と、破滅型の行動者として青春を燃やし、自己崩壊していった柏木とは、六条院の「眼」の人と、現実を見ることのない情念の人と言えそうな関係にあります。

夕霧を一言で言えば優秀な二代目で、父の築いた大物官僚への道を自然に歩む人物でした。策士型の権力者じみた「あく」もなく、絶対の危機に遭遇することもない、父源氏とはまったく異なる人生の体験者でした。

十二歳の元服を機会に、源氏は夕霧を大学寮に入れます。平安朝の当時、大学寮で学ぶ者は、諸学をもつて宮仕えする中流貴族の子弟で、上

を、柏木に与えるものでした。同時に、源氏とわが身の懸隔を思えば、とうてい宮の愛を得られそうもない無力感を柏木に背負わせるものでありました。

流貴族の子弟は、専門家を家庭教師にして気ままに学ばばよかったのです。しかも、嫡男夕霧を彼の従兄弟たちより遙かに下位の六位に叙し、辛い修業時代を与えたのは、父源氏の人間観や子育て観によるものでした。

幼い夕霧に父の思いは届かず、彼は父の処遇に不満でした。しかし反発の行動には出ず、屈辱の中で刻苦し辛抱強く学んで、本格的官僚に育つ基礎学力を身につけたのです。また雲居雁との「筒井筒」の幼恋も、父親同士の対立で難航しますが、律儀に待ち、数年後の恋の成就を気長に勝ち取ります。理性と平衡感覚と慎重さ、それは、父と左大臣家譲りの資質の混交でしょうが、源氏物語の人物の中で唯一本格的に学んだ経験が、夕霧にもたらしたのかも知れません。そして、その特質が、夕霧を「視点的人物」として用いる時、抜群の効果を見せるのです。

夕霧を六条院の「視点的人物」と規定するのは最近の通説です。「野分」巻で紫上を垣間見し、養女格の玉鬘に戯れる父源氏の異常な姿を覗き見るあたりから始めて、六条院の物語は、夕霧の「眼」を通して描か

で物語は大きく動きます。

柏木は、必ずしも現実の契りを求めて忍んだのではないように思われます。宮に逢い、思慕の念を訴えて、「あはれ」という愛憐の言葉を求めただけだったのです。しかし、侍女小侍従は不用意にも宮の至近距離に柏木を導き、宮は、柏木が幻想したような毅然とした内親王ではありませんでした。ただ恐れわななき、口もきけない、頼りなくかわいい女に過ぎなかったのです。偶然が柏木の自制を奪い、彼は激情に身をゆだねることになります。それは柏木にとって予期せぬ事態でした。ほとんど意図せず、彼は源氏を裏切ってしまったのでした。

予期せぬ事態は柏木を惑乱させました。怯えおののき、やがて密通の事実を知った源氏を恐れ、その畏怖は自己増殖して柏木を押し潰すことになりました。美化された宮の幻影を恋した柏木は、今度は恐ろしい断罪者としての源氏の幻影を、ひたすら畏怖するのです。

「柏木」巻は、柏木の死への道行きを、彼の内面から描いた「あはれ」の滲む巻です。

そして、彼の死への傾斜の経緯もまた、夕霧の「見」「看取る」世界だったように思われます。

(高知女子大学保育短期大学教授)

れ始めます。そして、「見られる」ことを通して六条院の絶対性は侵され始めるのです。六条院を「見る」夕霧の「眼」があばき出したものは大きく、その眼差しを通して、六条院の絶対性と光源氏の権威が揺れ始める、と言っても過言ではありません。紫上を垣間見した夕霧の惑乱と激しい思慕は、第二部の、柏木・女三宮の物語の原型にも容易になるのです。

垣間見に始まる紫上への夕霧の思慕は、生涯続く深いものでした。しかし、現実の行為者でなく六条院の「眼」であるという彼の性格と役割故に、夕霧と紫上の密通はなく、息子による父の妻への犯しという行動は起こりようがなかったのです。夕霧が紫上を思慕して人倫を越える物語は、六条院に起こりうる、しかし現実には起こらなかった物語として、人物と状況を変えて発足する、柏木・女三宮物語の母胎になるのです。

ところで、「見る人」であった夕霧に対して、幻影の恋に殉じて自滅した柏木は、現実の見えない情念の人でしょうか。六条院の蹴鞠の日の垣間見を決定的な端緒とする柏木・女三宮物語は、夕霧の紫上思慕の物

語と相似形の発想を思わせます。しかし、「野分」巻同様に御簾を小道具にして構想される「若菜」巻の垣間見は、女三宮を見ているようでいて、わが心の憧憬が造りあげた、異様に美しい女三宮の虚像を凝視しているに過ぎない柏木を浮かびあがらせるのです。

柏木は「よき人」「をかしかりし人」と死後も評される風流才子で、虚妄の恋に殉じた彼に、作者は「柏木」巻一卷を与えます。柏木には、若くして高貴な女性への憧憬があり、女三宮を妻にと望んだのも、朱雀院鍾愛の内親王への執着に出発していました。宮が六条院源氏の正室として降嫁した後も、その執着は失われずに恋文を贈り続けて、まったく偶然に、「言い知らずあてにらうたげ」な彼女の姿を垣間見したのです。

垣間見は、想念の中で日々美化されていく女三宮に一步近づいた喜び



◇

六条院の蹴鞠の日から六年、柏木の宮への愛着はなお持続し、紫上の発病で源氏が六条院を留守にした間隙を縫って忍び、逢瀬を遂げること

賛助会員募集中!!

年額 2,000円

- ① 機関紙「文化高知」を年6回お手元にお届けします。
- ② 事業団発行の出版物の10%割引 (一部例外あり)
- ③ 主催事業や刊行物の案内 (マスコミ利用の場合あり)

[※上記特典は申し込みいただいた日から1カ年有効]

- ①郵便振替 ②現金書留 ③直接事業団へ…

いずれの方法でもけっこうです。

特典 費典

※お申し込み

苦悩する現代山村 (7)

—その再生をめぐつて—

大野 晃

第二の点は、森林環境保全への上流と下流の連携問題である。森林の環境保全に果たす公益的機能が低下すれば、水害や水資源の枯渇問題などが発生し、下流域の都市住民の生活に不安をもたらすことになる。それゆえ、わが国の国土・環境の保全を長期的にはかかっていくためには、環境保全の担い手たる山村住民を下流域の都市住民を含めた国民的総意で支援していくコンセンサスを形成していかなければ、森林環境交付税の実現も難しい。

したがって、そのコンセンサスづくりには、まず第一に、山村の住民は自分たちがこれまで行ってきた田畑や山林などの地域資源の管理が下流域の都市住民の生産と生活に重要な役割を果たしてきており、その行為が「社会的に価値ある行為」であることを自覚し、環境保全の担い手としてその社会的行為に誇りを持つことが必要である。

の管理という行為が「社会的に価値ある行為」であり、自分たちの生産と生活に重要な役割を果たしていることを認識しなければならぬ。しかし、下流域の住民には、その「価値ある行為」の恩恵に浴している状況が日常的に見えないため、上流域の山村住民のこの行為に対する認識と正当な評価が難しい状況にある。そのため、第三は、山村の住民は都市住民と積極的に交流し、その場を広げていく必要がある。森林の大半をかかえている山村が、国土・環境の保全をはじめ水源のかん養、憩い・休養する場などを提供し、山村が多面的役割を果たしていること、理解を都市住民に求め、山村住民の「社会的に価値ある行為」への相互理解を深めることによってその評価と山村支援の気運を国民的に高めていくことが重要な課題になっている。

第三に指摘すべきは、山村の総合的対策の欠如である。国は山村に対してこれまで種々の対策を講じてきた。しかし、それにもかかわらず人口減少に歯止めがかからず、高齢化の急速な進行で限界集落が増加し限界自治体化が進みつつある。それは、これまでの対策が農業、林業、道路建設、福祉、医療、国土保全等のそれぞれを有機的に結びつけた山村対策を欠いてきたからである。すなわち、全体像をえがき各パートの連関が見え、役割分担が明確に位置づけられた総合的対策を欠いたまま各部署がバラバラに対策を実施してきたからである。国は、タテ割行政の弊害を除去するとともに、問題が発生してから対処する後追い行政ではなく、問題が発生する前にこれを予測し対処していく「予防行政」を行政本来の姿として再考すべきである。五〇年、一〇〇年先の日本の国土・環境の保全を考え、山村の総合的対策を予防行政として実施することの重要性をいまこそ真剣に考えていかなければならない。

最後にわが国の工業偏重の産業構造の仕組みにふれておかなければならない。冒頭でも述べておいたところであるが、構造的な地域間格差の拡大によって貧困化しつつある現代山村の現状を考えると、その格差を規定し、農工間不均等発展を基底にもつわが国の産業構造の歪にメスを入れなければならぬ。農林漁業を切り捨て・自由化によって外国の農

林水産物を大量に輸入し、国内の生産者を窮地に追い込み、地域資源を荒廃させるような現行の産業政策を改め、農林水産物の国内自給率を高め、農工間にバランスのとれた産業構造を確立していくような産業政策への転換が必要である。

（人間と自然）の貧困化から人間と自然の豊かさを創造していく道、これが二十一世紀に向けて人類が歩むべき方向であるならば、この方向に沿うべくわれわれが志向していく道は、農林業がもつ多面的役割を生かし、山村を（人間と自然）の豊かさを創造していく場としてとらえることであろう。そして、その豊かさを創造し、実現していく国民的運動を「カントリー・ルネッサンス」として展開していくことが現代に生きるわれわれに課せられた社会的責務である。

この点にさらに付言するならば、これまで述べてきた高知の山村の社会的現実からして、林野率が全国一高い高知の県民がカントリー・ルネッサンスのオピニオンリーダーとなり、高知県が国に先がけ上述した山村対策の具体化を国に要請することにも、その実施の「先槍」となり国政をリードする県になることを期待し結びとしたい。（完）（高知大学人文学部教授）



第11回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

高知を撮る

漁村の生活

前田 嘉彦

いまでも日柄や縁起を気にする人は多い。たとえば友引の日に葬式を出す人はまずいない。友引に葬式を急ぐのは、この日に死者を葬ると、身内のものが続いて死ぬといわれてきたからである。だがこれは、朔日（ついたち）の日から医者に行くのは、縁起がわるいから止めておこうといった類で、科学的根拠をもつものではない。生活習慣化しているものに無理に逆らうことはない。周囲の嫌がるのをおしきって葬式をしなくてもよいが、もし友引に葬式をしたとしても、そのために身内の者が続いて死ぬことはありえない。同様に大安に結婚式をあげたからといって、必ず皆がしあわせになるとは限らない。他の日に式をあげたものでも、しあわせなカップルはたくさんいる。思い立つ日が吉日で、それぞれの日をよしとすればよいのであって、しあわせになるかならないかは、本人たちの努力や心配りに負うところである。

〈神様〉〈仏様〉

風俗歳時記



それしても困ったときの神頼みで、思わず「神様」「仏様」という心境になるときがある。普段あまり宗教心を持ってない人でも、こつこつとを一度や二度経験したことはないものはいないだろう。難しい詮索はおくとして、われわれの意識下にはこうした潜在的なものがひそんでいるのだろうか。少なくともそこに一種の宗教的心情が働いていることは確かである。最新の技術を駆使し、極めて高度な建設機械を使って建てる超高層ビルでも、着工前には必ず土地神に安全を祈願する「地鎮祭」を行う。自動車の運転席に、神社や仏閣のお守りがぶら下がっているのはよく見かけるが、日本航空各社のコックピットには、必ずといっていいほど成田不動山のお守りがぶら下がっているという。ハイテクの固まりのようなジャンボ機もそのお加護で飛んでいるのだ。世の中やはり一通りの理屈ではいかにいへぬ。

小石の波紋のように

太田 きぬ

青年センター手話講座受講生が「このまま終わらせたくない」と手話サークル「With」を結成したのが、平成五年十二月。名前は山田洋次監督作品「息子」のイメージソング中島みゆきのタイトルから取りました。

メンバーは主に二十代を中心に、約十五名。毎週水曜午後七時～九時まで活動しています。学生や公務員、病院職員、保母等多様多様ですが、聴覚障害者の方々と交流したい、様々な体験と一緒に味わいたいという思いは皆、同じです。

「見て分かる」ということに重点を置き、童話表現、ジュエスチャーゲーム等ほのぼのとした雰囲気の中で勉強をしています。まだまだ未熟ながら、去年のセンター祭では手話コーラスをやらせていた



「NIRO-PONX」

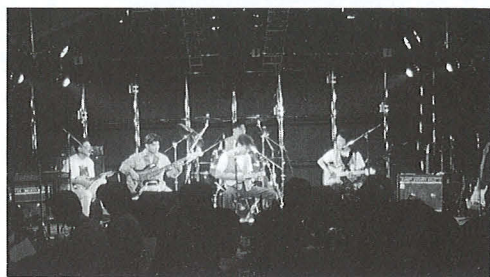
楽しく、まじめにやっとります

坂田 弘之

三年ほど前、高校時代の同級生を中心に、バンドを結成しました。

バンド名はよく「何ていうんですか」と聞かれますが、「ニロポン」といいます。由来はすごくテキトーなもので、結成時に飲み会をしていてバンド名を考え

ていました。たまたま注文したニロギの焼き物にショウイユがついてきたので、「おばちゃん、ニロギにはボン酢やないといかんちゃ」となり案が出尽くしていたこともあって、「それ使おう」と「ニロギにボン酢」となっちゃいました。



主にブルースや、ビートルズを演奏していますが、初めからそんな調子なので、演歌や歌謡曲、ついにはアニメの主題歌までやってしまうという貧欲さとポリシの無さが身上です。久礼野地区で毎年開催されるお祭りな

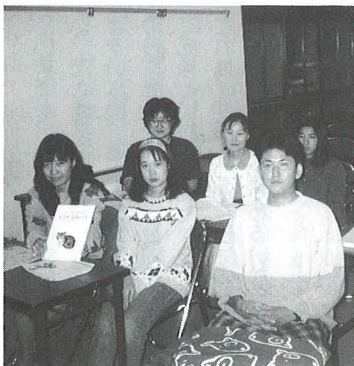
「点字クラブ」

明るく・楽しく・面白く

市川 務

私達、「点字クラブ」は、高知市青年センターにて、毎年、催されている点字教室生が教室の終了した後、勉強した点字を生かそうという事で結成されました。現在のクラブ生は講師の方を含み十七名で、毎月、原則として第二と第四の木曜日に高知市の青年センターで活動をしています。メンバー層はというと、主に高知市在住、及び在勤（在学）の十六から三十歳までの青年の活動の場という青年センターの規定に基づいた対象となっております。また、この規定に基づくメンバーの募集も随時していますので、興味のある方は、見学にお出で下さい。

話をメンバー紹介に戻しますが、現在、二十代後半の学生から、福祉関係の仕事に従事している者など、幅広い年齢層で活動していますが、現在、男性のメンバーが少ないという事や、もっと高校生等に



「大野見田んた組合」

米づくりでリフレッシュ

田中 俊

うさぎ追いかの山：とんぼつり今日ほどまで行ったやら：小学唱歌や俳句に詠まれて来た私達の心の原風景が宅地化の進行や減反政策の中でどんどん破壊されて行く。そして安全でおいしい米を食べたい。そんな思いの中でふとした話の弾みの中から私達の素人の米作りが始まり三年が経過しました。



耕作地は四万十川源流の大野見村、休耕田を借り受け管理を現地のO氏に依頼、初年度は六世帯三反歩からスタート、今年九世帯五反歩を耕作するまでになり今年も豊作でめでたく収穫祭を行いました。私達の本職は看護婦や事務員、検査技師や大工さん、看板製作や元教師で画家、或いは主婦等雑多ですがその雑多な所が魅力で三年間頑張ってきました。運営については一応の約束事を決め必

だきました。

時には青年センターを飛びだし、聴覚障害の方々の登山やスキー、スポーツ交流会に参加させてもらっています（もちろん、宴会にも）。

私達のしていることは小さな活動ですが、小さな石が波紋を起すように、ほんの少しでも関心を持つ方が増える事を願ってやみません。興味のある方、ぜひ一度見学に来てみませんか。

連絡先 高知市棧橋通二一五〇
青年センター
電話 〇八八八一三一四九三二

んかにも二年続けて呼んでいただいたり、老人施設に勤務する友人を通じて、慰問なんかもさせてもらっています。

独自のコンサートも含め、自分たちもお客さんにも楽しんでいただけるよう幅広いジャンルと柔軟な心を持ち、歳もトシですので（三十前）、少しでも上手になるよう、日夜がんばっています。

どこかでお会いした時は少しだけ耳を傾けていただければ、とってもうれしいです。

連絡先 高知市本町五一四四五
電話 〇八八八一三三一九四六一

も加わってもらいたいという事を考えています。

また、活動をしていくには、どうしても点字用の紙などが必要不可欠なので、そういった用具についての費用をどうクリアしていくかという事がありますが、「明るく・楽しく・面白く」をモットーに普通のボランティアとは違い、地味で作業ばかりが主となる事ですが、現在も絵本の点訳作業を行い、できた絵本は、高知市の点字図書館に寄贈しています。

連絡先 高知市九反田二二二八
電話 〇八八八一八四一九二二九

要経費については各自が出資金を出し合いい、労働は男女平等、いわゆるイベントに参加するのではなく実際の労働に参加することが原則です。

そういった中で自らが労働をする喜びを体験すると共に、夏にははたる狩りやキャンプ等、現地大野見村の人々との新たな交遊関係も生まれて来ています。心身共にリフレッシュ、この自然一杯四万十川源流の里大野見村で労働する喜びを皆さんも体験して見ませんか。

連絡先 高知市朝倉己三三四一五
電話 〇八八八一四四一六〇二七

散歩の途中で



秦の敷島紡績(株)高知工場の敷地北側。東西に真っ直ぐのびる藪野塚ノ原線。近未来、32万都市高知の大動脈となる。しかし、知寄町藪野線に接続されるまでは、この辺りの交通量はさして多くないだろう。決して奨励するわけにはいかないが、数人の少年たちがグラウンド代わりに野球ゴッコに興じていた。

風伯

黒い羊

界隈で会食することになったのである。夫人にとつては数年ぶりの心うきたつ「小旅行」であった。

二人で「スパイ大作戦」なみの計画を練った。場所の選定に当たっては、(1)段差がなく車椅子で乗り入れできること、(2)座卓ではなくて椅子・テーブル式であること、

③洋式トイレがあること、これがM夫人にとつての必要最低条件であるという。折りたたみ式の簡易車椅子も買った。これならタクシートのランクにおさまる。

往路はいつも世話になる近所のタクシのお蔭で万事順調。レストランも協力的で食事も快適。

ところが、帰路に思わぬ伏兵が待っていた。其百貨店近くで列をなして客待ちしているタクシの先頭車に乗ろうとすると、運転手君は顔をしかめ、激しく左右に手をふって、乗車を拒否したのである。そのとき、車椅子を押してくれていた碧眼大兵の友人が、慰めるようにポツンと言った。

「どの群れにも黒い羊が一匹いるものさ」。それは、かつて自国の大統領の不祥事に際して、彼が憮然として呟いた諺であった。

(念)

第12回

高知市都市美デザイン賞 推薦募集

事業団では、街に個性と調和をもたらしている優れた建造物を広く知ってもらい、より美しいまちづくりを進めるよう「高知市都市美デザイン賞」を選出しています。

身のまわりで、街の美観や景観づくりに貢献している建物・モニュメントなどを推薦してください。

【対象】 高知市内にあって平成7年1月1日から平成7年12月31日までに完工した建築物・建造物

【推薦締切】 平成8年1月31日(水)
(郵送の場合当日の消印有効)

【推薦】

どなたでも推薦できます。はがきに次の事項を記入のうえ、推薦してください。一人で何件でも推薦できますが、はがき1通に1件とします。

- ① 建築物・建造物の名称・所在地・完成時期
- ② 推薦の理由
- ③ 推薦者の住所・氏名・年齢・職業・電話番号

【送り先・問い合わせ先】

高知市文化振興事業団「都市美デザイン賞」係

第12回

写真コンテスト・高知を撮る 作品募集

【テーマ】 高知を撮る

*高知に関する写真であれば撮影対象は問いません。

【応募】

- *どなたでも、一人何点でも応募できます。
- *254mm×365mm(ワイド四つ切)以上の作品で、発泡スチロールパネル貼りとします。
- *組写真は3枚までで、組写真であることを明記してください。
- *その他詳しい要項は事業団までお問い合わせください。

【応募締切】 平成8年1月31日(水)

【賞】 特選 2点(賞状と賞金5万円、副賞)
準特選 15点(賞状と賞金1万円、副賞)
入選 70点以内

【作品展】

平成8年3月市民フロアにて開催予定

【応募先】

- * (財)高知市文化振興事業団
- * 高知県カメラ商組合加盟店または、フジカラープリント取扱店

第6回

高知出版学術賞

推薦受付

「高知出版学術賞」は、当該年度における最も優れた学術出版物を顕彰することによって、学術研究の振興を図ることを目的とした賞です。該当図書について、皆様のご推薦をお待ちします。

【対象】

次の事項をみたすもので、高知出版学術賞審査委員会に推薦されたもの。

- ① 高知県内に在住する者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。
- ② 一九九五年中(奥付の日付による)に発行された単行本。

【推薦】

自薦・他薦を問いません。必要事項を記入した所定の推薦書に、該当図書二部を添え、審査委員会まで提出して下さい。なお、推薦書は請求下さい。お送りしません。

【受付期間】

一九九五年十二月十日(日)～一九九六年一月三十一日(水)

【表彰】

三点以内とし、それぞれの著者または編者に賞状と賞金十万円を贈ります。

*推薦・お問い合わせは、文化振興事業団内、高知出版学術賞審査委員会までお願いします。